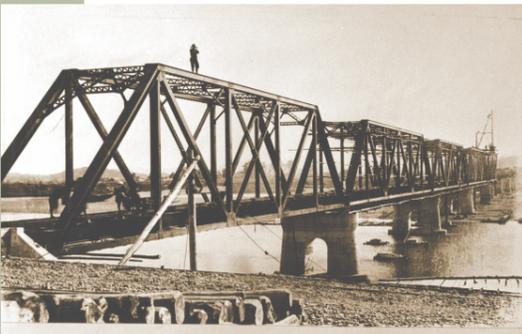


明治から大正 そして昭和へ

▲富岡橋開通式通初めの光景（明治40年頃）



▲大正5年に阿南鉄道(株)によって、中田駅-古庄駅間が開通し、昭和11年には羽ノ浦駅-桑野駅間（日本国有鉄道）が営業を開始。昭和17年の牟岐線（徳島駅-牟岐駅間）の全線開通は、戦時中の暗い世相の中、県南の人々にとって明るいニュースとなりました。



▲海上輸送の拠点となった橋港（大正初期）



▲東新町ラジオ体操の会。富岡の商店街では、町ごとにラジオ体操が日常的に行われていました。（昭和15年頃）



▲阿南自動車の車体はすべて青塗りで、俗に「青バス」と呼ばれていました。（提供/県立図書館）



▲昭和天皇の巡幸（昭和25年3月26日/桑野駅前）



▲戦時中の昭和14年に結成された防空組。空襲に備え、各地で頻りに訓練が行われていました。

明治のおとずれ

文明開化の音がした——。慶応4（1868）年1月4日、伊島沖から繰り広げられた日本史上初となる洋式軍艦同士の海戦で、幕府軍艦「開陽丸」が薩摩軍艦「春日丸」に砲撃。阿波南方では、世にいう「阿波沖海戦」の一発から明治維新がやってきた。

明治4年（1871）7月の廃藩置県によって徳島藩は徳島県となりました。当時、郷町富岡には、勝浦・那賀・海部の3郡を管轄する南民政所や郵便役所（後の郵便局）、同11年には、郡区町村編成法による那賀郡役所が設置され、すでに県南の政治・経済の中心をなすとともに、天神原（現在の住吉町の住吉橋付近）に近郊の物産や那賀川上流域の産物を取扱う引請所が設けられ、商人のまちとしても賑わって

いました。

また、県南は屈指の米どころで、橋港は米の積み出しや筵（むしろ）の取引が盛んに行われ、明治29年には徳島・甲浦航路の汽船が寄港。那賀川では高瀬舟が物流を支え、明治38年には徳島-羽ノ浦間に乗合い馬車を通り、橋の建設も進められました。日露戦争後の明治45年3月には、文明開化の象徴、鉄道の建設が始まり、県南の町並みや暮らしに華やきが見え始めます。

近代国家のいしずえ

近代日本の夜明けは、徴兵制に基づく国民皆兵、地租改正による税法の近代化、そして、それらを支える人づくりの基礎としての教育制度改革を柱として始まりました。

幕末までに阿波南方には、共工事が始まったのもこの頃です。大正7（1918）年には、古庄に阿南自動車協會が創立され、阿南鉄道からの乗合自動車路線が普及・拡大。昭和17（1942）年の国鉄牟岐線（徳島-牟岐間）の全線開通は、県南の人々の宿願であり、阿南地域発展の基盤をより強いものとなりました。

戦火の拡大、戦争終結

昭和改元の祝賀ムードもつかの間、時代は全面的な対外戦争へと向かい始めます。昭和6年の満州事変から昭和12年の日中戦争、さらに第二次世界大戦へと戦火が拡大するにつれ出征者も増加。第二次大戦では多くの戦病死者を出しました。空襲によって爆撃された地域は富岡や椿泊、伊島、新野、羽ノ浦、平島などに及び、各地で防空訓練が盛んに行われました。そして、昭和20年8月15日、戦争終結、敗戦——。

その後、日本本土は混沌とし、物資不足で生活は窮迫。追い打ちをかけるように、昭和21年12月、潮岬南方沖を震



▲富岡中学校の正面玄関（昭和11年頃）

藩主の命で創立された庶民学校が3校（日和佐郷学校、大里郷学校、暇修館（明治4年に富岡郷学校と改称））があり、那賀郡の教育は主に暇修館で行われていました。明治5年の学制公布により、翌6年に富岡郷学校は廃止され、富岡小学校が開校します。

明治29年、県下でただ一つの中学校であった徳島尋常中学校（現城南高校）の第一分校が脇町に、第二分校が富岡に開校。その後、明治32年には分校は独立し、第二分校は富岡中学校（現富岡西高校）となりました。当時でいう県南の最高学府としての役割を果たすことになりました。

こうして、社会の中核を担う人材の育成を目指す体制が県南にも整えられるようになり、向学心に燃える青少年の希望に応えました。

また、この頃の小学校は村の文化の中心であり、教師は源とする昭和南海地震が発生し、地震動と津波で甚大な被害をもたらしました。そうした中で、天皇陛下の巡幸は、疲弊を極める人々に希望と光を与えました。

戦後のまちづくり

戦後、新しい民主主義が定着する過程において、日本の社会や政治・経済システムは大きく変化していきます。

急激な交通・通信網の発展による生活圏域の拡大や教育・文化の増進に伴い、基礎的自治体としての町や村の能力を一段と強化する必要性が高まり、昭和28年に町村合併促進法が施行されました。

阿南市域では、市の誕生に至るまで、昭和29年3月から6次にわたる町村合併が行われ（P27-28参照）、行政区域の広域化と財政基盤の強化が図られました。しかし、戦後の混乱や義務教育の6・3制導入による新校舎の建設、度重なる災害復旧費の支出などで財政負担は増大の一途をたどり、赤字財政の解消が大きな課題となっていました。

移り変わる暮らし

大正時代になるとマスメディアが発達し、文化・芸術・学問が大衆化します。地域では青年団組織が教育機関の役割を担い、町では庶民の芸能娯楽施設がオープンし始めました。道路や橋梁、トンネル、発電所の建設など、公